

文化・芸術

「金太郎」

1950、60年代、紙本彩色
47・3センチ×51・1センチ

小杉放菴

(1881～1964年)

小杉放菴は、しばしば神話や昔話の世界を画題に描いています。雅号を小杉未醒(みせい)とした明治末から大正期には、一つの場面を劇的に捉え、構築的で細やかな描写で描きました。西洋の絵画や文学の影響も色濃くみられます。一方、晩年期には、物語の世界を最小限の筆遣いと余白を生かした構成によって、見る人の想像をかきたてる絵へと変化しました。

本作は70歳代の一点。このころ放菴は、とりわけ「金太郎」を繰り返し描きました。金太郎が自然に溶け込み、動物たちと一体となって弾んでいます。自然との調和や生命のつながりが感じられます。(小此木)

大川美術館コレクションから

《名画の扉》

